

# 川からの都市再生

～2つの民主主義—韓国・ソウルと徳島を例に～

吉川 勝秀

Written by  
Katsuhide Yoshikawa

## はじめに

歴史を通じて水・川は生命の源であり、都市の形成や発展において、物流の基盤や都市の軸を形成する空間として都市とは切り離せない存在であったことは事実である。二〇世紀の人口の増加、都市化の進展により、パブリックな都市インフラである川の価値が忘れ去られていたが、再び水辺に向き合い、川の再生から都市を蘇らせることが議論されるようになってきた。そして、その先進的な事例も数多く見られるようになってきた。例えば、ボストンでの水辺からの都市再生、シンガポールのシンガポール川、東京の隅田川、徳島の新町川からの都市再生などである。そして今、世界から注目される韓国・ソウルの清溪川チンソクグンからの都市再生がある。

以下では、このソウルの事例を中心に、日本の例も紹介しつつ、水辺からの都市再生について述べてみたい。

## 世界の河川と都市の風景

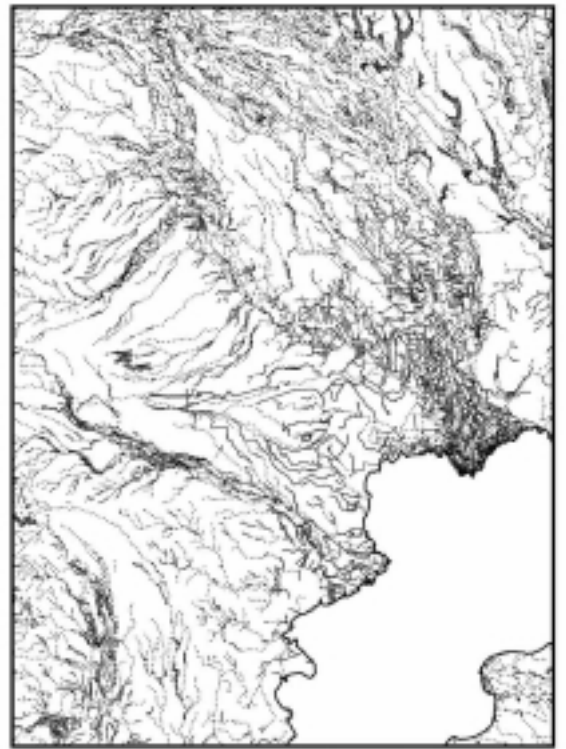
都市の風景を形成する要素として、パブリックな都市インフラとしては、道と川と緑地・公園が挙げられる。そして、プライベートなものが多くが建築物がある。日本では、都市の空間の約一〇パーセントは河川空間であり、道路が一六パーセント程度、公園・緑地が三パーセント程度

### 東京の日本橋川の風景



であり、都市空間の約三割はパブリックな空間（公有空間）である<sup>1)</sup>。土地と建物の私有財産権がきわめて強く、都市の計画的な誘導がきわめて困難な日本においては、公有空間である川（水辺）の再生とそれを核としての都市再生が考えられてよい。

【図1】首都圏で消失した河川・水路網(実線が消失した川、破線は現存する川)



世界の風格のある都市を見ると、都市の骨格を形成する川と河畔の町並みがある。例えばパリのセーヌ川、ロンドンのテムズ川、ローマのテヴェレ川、フィレンツェのアルノ川、ブダペストのドナウ(ダニョブ)川と河畔の町並みなどが挙げられる(1)。アジアでも、最近のシンガポールのシンガポール川、東京の隅田川、徳島の新町川、北九州の紫川などがある。

一方、一九世紀末から二〇世紀を通じては、都市の骨格を形成していた川や水路が消失した時代であった。典型的なものとして例えばウィーンのウィーン川(一九世紀末から二〇世紀初頭に蓋かけ・暗渠化)、東京の日本橋川(一九六〇年代に高架高速道路で上空占用)、ソウルの清溪川(一九五〇年代後半に蓋かけ・暗渠化してその上を道路が占用、一九六〇年代後半からさらにその上空に高架の高速道路を建設)などが挙げられる。

首都圏で見ると、明治時代から現在までに消失した水路網は図1に示すとおりである。東京の中心部と東部の低地や西部の丘陵河川の多くでは、その水質が悪化し、モーターゼーションの時代の背景下で埋め立てられ、あるいは暗渠化されて下水道化された。その上はごく一部の緑道を除き、道路が建設された。このような川や水路の埋め立てについては、都市化の著しいアジアの都市においても、同様なことが行われてきた(あるいは行われつつある)。

このように都市化の時代に、環境が悪化して消失し、あるいはパブリックな都市インフラとして忘れ去られていた川や水辺が、これからの都市再生の重要な素材として考えられるようになった。日本では、一九八〇年代中頃以降、川の行政を中心に、河川の空間としての再生が事業化されるようになった。ふるさとの川モデル事業、桜つつみモデル事業、マインタウン・マイリバー、緩傾斜堤防やスーパー堤防事業などと呼ばれたものである。

そのような河川・水辺の再生から都市再生を進めてきた先進事例としては、ボストンのチャールズ川・スネーク川の再生からボストン湾のウォーターフロント再生、さらにはダウンタウンと水辺を分断する高架高速道路の地下化(通称「BIG DIG」と呼ばれる大事業)、シンガポールのシンガポール川と河畔の再生、日本では前述の隅田川河畔や北九州の紫川河畔、徳島の新町川河畔からの都市再生、そして後述する韓国ソウルの清溪川からの都市再生などが挙げられる。

シンガポール川と河畔



## 東京の隅田川と河畔



河川と河畔の環境の悪化した時代の風景



河畔の再生が行われた後の最近の河畔の風景

朝鮮時代の後半には、貧困者が河畔に小屋を建てて住むようになった。都市化によって生じるあらゆる問題、すなわち都市の排水路としての水質悪化、水害の発生、河畔の風景の悪化等が生じた。

そして、一九三七～四二年にかけて一部份間が覆蓋され、一九五八年から覆蓋工事が本格化し、一九七八年までの二〇年間続いた。この覆蓋により暗渠化した清溪川の上は平面道路として利用されるようになった。さらにその上空に、清溪高架道路が建設されることとなり、一九六七年に着工し一九七六年に完成した。

(2) 清溪川の再生の意義  
清溪川の復元は、長く失われていたソウルの自然特性を再発見する、六〇〇年に及ぶソウルの都市の歴史への連絡経路を開く、ソウルを環境に配慮した都市に変貌させることにより、都市生活者にソウルの歴史や文化、自然の重要性を示すという意味があるとしている。

すなわち、この再生事業の目指すところとしては、六〇〇年の歴史を持つ大都市の歴史のおよび文化的独自性の回復、環境に配慮し、人間志向型の都市空間の創造、清溪川を上

## 韓国・清溪川 再生から都市再生へ

川の再生から都市再生を進める事例として、韓国・ソウルの清溪川再生からの都市再生という世界的に注目される事例を取り上げ、報告し、考察してみたい(15)。

### (1) 清溪川の歴史的経過

清溪川はソウルの中心地を流れる川であり、ソウルが韓国(朝鮮)の首都となつて以来、その中心にある川である。かつては人が行きかい、多くの橋梁も建設され、そして洗濯の場、子どもの遊び場として市民の生活に欠かせない川となつてきた。ソウルの発展とともにこの川は、都市の下水道の機能を果たしていたことから環境が悪化し、また、水害もしばしばあった。そして、

## 北九州の紫川と河畔



から圧迫している高架および平面道路の安全问题への抜本的な取り組み(撤去)、中心部のビジネス地区の再活性化によって、ソウルを国際金融およびビジネスの中心軸へ変革させることを掲げている。そして、これにより新しい都市管理のパラダイムを定め、またソウルの独自性を明確にし、国際競争力を増進するとしている。これにより、『ソウルは二世紀の文化・環境都市である』と宣言している。

（3）事業の内容

この事業は、清溪川を覆う道路（平面道路と高架道路）を撤去し、開渠化する、開渠となった清溪川を人々が利用できる自然的な川に再生する、このような都市インフラとしての河川再生を核として、河畔の周辺の都市を再開発することとしている。そして、この事業を選挙公約として二〇〇二年四月に当選した現市長の四周年任期内である二〇〇五年一〇月まで、この事業を完了させるとしている。この約三年間という期間は「BIG D I G」の約二年着工、二〇〇三年に都心部のトンネルの一部区間を除いて開通したのと比較しても、驚くほど迅速である。「BIG D I G」の地下化した道路敷地の緑化や整備はまだ完了していない。

この事業では、撤去された道路を地下等に再建することせず、都心交通の需要管理、地下鉄、バスでの輸送力の増強、商店訪問者への各種顧客対策を講じることに対応することとしている。都市の再開発に関しては、地域住民の意見を反映して、市が中心となって再開発を進めることとしている。

なお、この高架道路・平面道路の基盤となっている覆蓋構造物は、一九九二年の安全点検の結果、老朽化等のために補修と補強が必要であることが明らかに、一九九四～九九年に一部区間の補修と補強がなされていた。そして、全面補修には約一〇〇〇億ウォンを要するとされていた。道路そのものを撤去することで、その安全上の問題の抜本的解決が図られ、補修費

用も不要となることも、この事業の背景となっている。

清溪川の道路撤去、河川の復元に要する費用は、約三六〇億ウォン（約三六〇億円）と専門家は見積もっている。

（4）事業の合意形成と実施について

清溪川の復元については、市民による研究会での検討、周辺地域の都市開発に関する各種の研究があった。そして、二〇〇四年四月の市長選挙の重要な選挙公約となり、市民の関心が高まった。この選挙という場を通じて、この事業への全般的な合意が形成されることとなった。そして、この事業実施にあたって、専門家、市民、

NGO活動家による市民委員会で、主要な政策の審議と評価、調査と研究、市民意見の集約、市民に対する広報活動を行ってきた。特に、清溪川河畔の商店街の人たちへの対応が重要なテーマとなり、現地営業と移転の選択肢の準備等、対応が実施に移されることとなった。

この合意の形成プロセスさらにはきわめて短期間に事業の核となる道路撤去と川の再生を行うとしていることは、川からの都市再生についての韓国・ソウルの選択であり、特徴的なことであるとして注目されてよい。

徳島・新町川再生から

都市再生へ

川からの都市再生を進めている事例として、徳島の新町川について述べる。

再生前の清溪川の風景



再生工事の進む清溪川の風景



川からの都市再生は、例えば東京の隅田川における東京都、北九州の紫川における北九州市などのように、多くの場合、行政の主導による。

再生後の清溪川のイメージ



建つようになったことである。

前記の河畔の公園整備とその対岸の市民によるボードウォークの整備により、都市づくり・まちづくりから取り残され、忘れられていた新町川が、都市再生の表舞台に登場するようになった。

(3) 市民主導、行政参加

市民の活動は、一九九〇年から新町川のゴミを清掃することから始まり、現在もその活動の中心となっている。この活動は、「新町川

るものが多い。それに対して、この新町川の事例は、市民主導・行政参加、あるいは日本的な民主主義による川からの都市再生の事例として注目されてよい。また、都市の中で川が軸となつて都市の再生が進み、形となつてきた事例としても注目されてよい。

(1) 川と河畔の再生の経過

徳島市は、中心市街地の活性化計画により、新町川の河畔に水際公園の整備を進めた(一九八六～八九年)。その後、徳島県により河岸整備が継続的に進められている。この整備は、戦災復興計画で新町川の河畔に計画されたペルト状の公園構想を現代的に実現するものであるともいえる。

しかし、徳島市の新町川を生かした都市再生の特徴は、行政主導によるものではなく、行

政による一部区間の河川インフラ整備をきうかけとしつ、次に述べるように市民主導に転換していったことである。

(2) 市民による河畔のボードウォーク整備

新町川河畔にはボードウォークが整備されており、川に顔を向けたレストラン等が立地している。このボードウォークは一九九六年に完成した。土日には河畔のボードウォークはパラスヨップで賑わう。

特筆されることは、このボードウォークは、市民(地元商店街の振興組合)が構想し、自ら商店街の高度化資金(公的資金)を借り、県・市の事業と連携して、商店街の駐車場であったところに整備したということである。その結果、人が河畔を歩くようになり、川に背を向けて建っていた建物が、川側を入り口として、川に面して

を守る会」によるものであり、その後、この会は川に囲まれた地域(ひょうたん島)を回る遊覧船の無料運航を行うようになった。市民が、市民による川の清掃を見て、さらに無料の遊覧船で川と河畔を眺めることが、川を生かした都市再生の重要な柱となっている。他に例を見ない市民によるボードウォークの整備も、その象徴的な出来事の一つといえる。

この会をリードする、NPO新町川を守る会の中村英雄さんによると、川を生かした徳島市のまちづくり・都市再生は、市民参加ではなく、市民主導、行政参加のまちづくり・都市再生であるといつ。

今日では、市民活動として毎日、何らかの川でのイベントが開催されるまでになっている。クルムスにはサンタクロースの乗る船を走らせ、フ

